

## 音のミュージアムロード

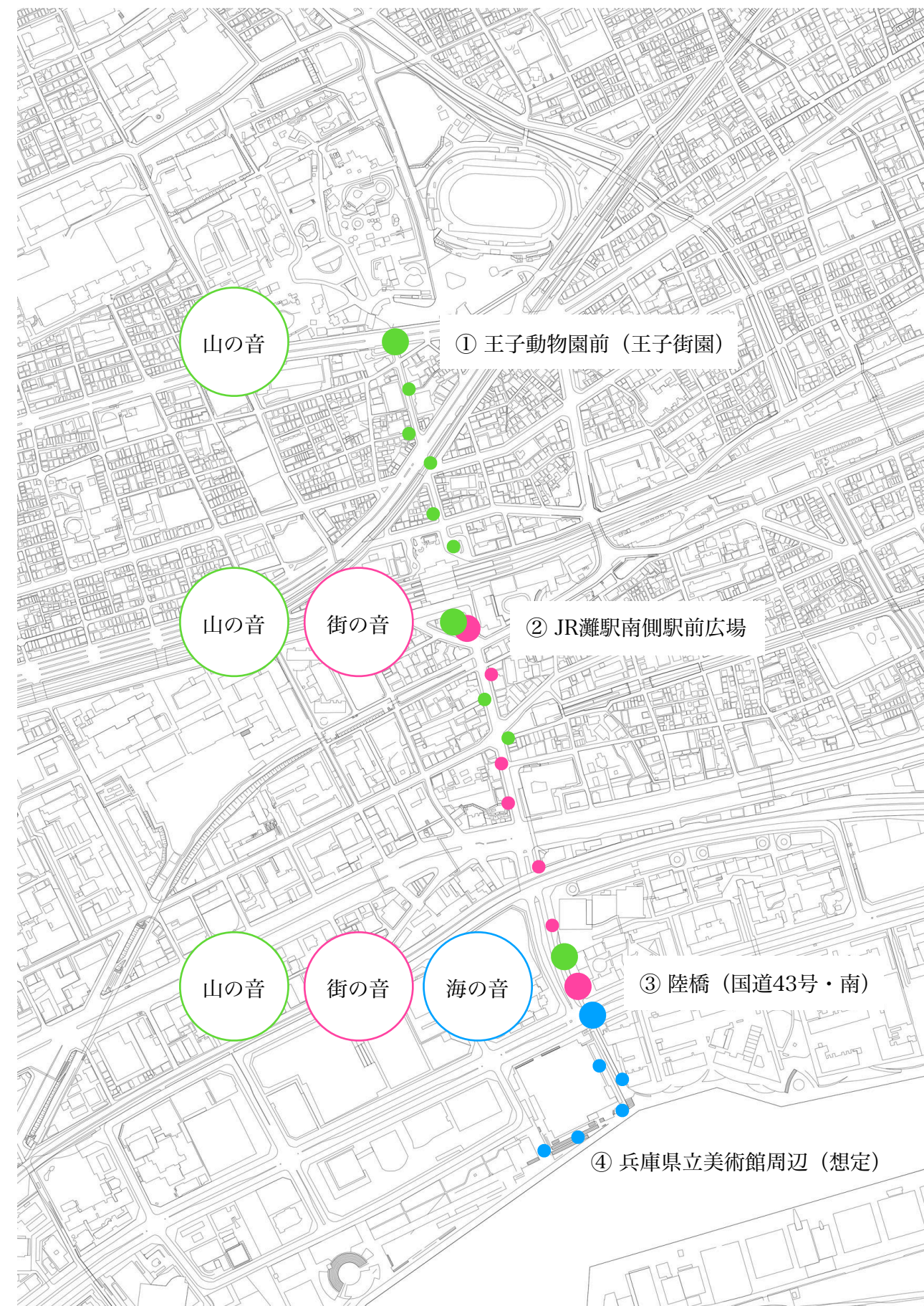
— 音でつなぐ都市と自然 —

ミュージアムロードは、神戸の街がもつ「山から海へ」という希少な地形と都市構造を、歩きながら実感できる道です。『音のミュージアムロード』は、この道そのものをひとつの展示空間と捉え、山・街・海へと移ろう環境の変化を音によって可視化・可聴化する試みです。視覚中心の美術館体験に対し、本プロジェクトが提示するのは、耳で感じ、身体で歩くミュージアム体験です。

全長約1.2kmの道の中に、「山の音」「街の音」「海の音」という異なる音のレイヤーを配置し、それらをなだらかな音のグラデーションとしてつなぐことで、歩くほどに風景が変わり、音が変わり、街の記憶が立ち上がってきます。それは、音を聴くためだけではなく、街そのものが響いていることに気づくための場所でもあります。

10年後、20年後も、音が更新され、記憶が重なり、人々の歩みとともに育っていく、生きた「音の展示空間」としてのミュージアムロードを構想します。

- ・山－街－海
- ・音のグラデーション
- ・聴く道／歩く展示
- ・目に見えないパブリックアート
- ・時間とともに育つ音の風景



- 山の音 鳥のさえずり、虫の鳴き声、湧きでる水 など
- 街の音 灘の酒づくりなど、神戸に根ざした様々な街・文化の音
- 海の音 潮騒、さざなみ、汽笛、港できこえる様々な音

## 音の拠点と配置の考え方

ミュージアムロード上の①～④のスポットに音の拠点を配置します。

王子動物園前（王子街園）、JR灘駅前広場、陸橋、兵庫県立美術館周辺を音体験の核となる地点として位置づけ、それぞれに異なる音のテーマを与えます。

その間の道では、設置が可能な場所に限り、音が薄く、遠く、記憶のように響く音環境を点在させます。それらの音は、歩くにつれて静かに重なり合い、次の音の拠点へと導くように立ち現れてきます。こうして音は、「点」としてではなく、道全体を貫く「線」として体験されます。歩くという行為そのものが、音の展示を辿る体験へと変わっていきます。

## メインスポット構成

### ① 王子動物園前（王子街園）

音のテーマ：山の音

- ・都市の中に現れる「もうひとつの自然」
- ・鳥、風、木々のざわめきを音楽的に構成
- ・「ここから音の旅が始まる」入口



### ② JR灘駅南側駅前広場

音のテーマ：山の音 + 街の音

- ・鑑賞・滞在が可能な広場空間
- ・山の音と、神戸を感じる街の音
- ・「鑑賞の場」として滞留を促す音環境



## スピーカー設置案

スピーカーは緑地帯や植栽内など、目に触れにくい場所に設置し、音が風景の一部として立ち上がるように構成します。

屋外環境に対応したガーデンスピーカー等、設置場所や周辺環境に適したタイプを選定し、景観や歩行動線への影響を最小限に抑えます。

### ③ 陸橋（国道43号・南）

音のテーマ：山-街-海

北側：山の音 中央：街の音 南側：海の音

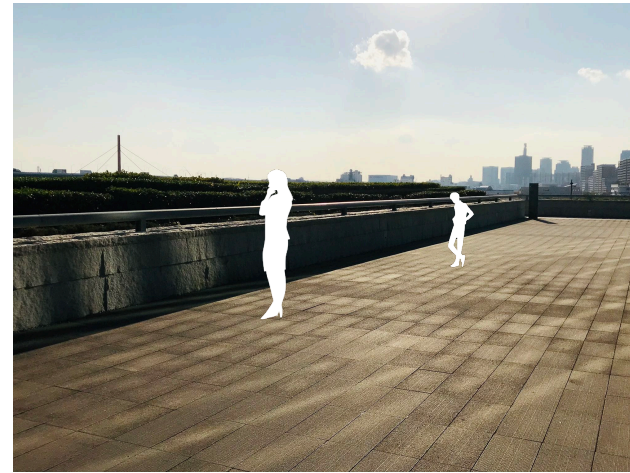
- ・歩行に合わせて音に移ろう体験
- ・北に山、南に海を同時に望める地点
- ・ミュージアムロード最大のハイライト



#### ④ 兵庫県立美術館周辺（想定）

音のテーマ：海の音

- ・ 静寂と開放感の中で響く海の気配
- ・ 音のグラデーションが完成する場所
- ・ 実装可否に関わらず、構想上の終着点として位置づけ



#### サウンドデザイン・機能・将来像

サウンドデザインの考え方

- ・ スピーカーや装置は極力見せない
- ・ 「見せる展示」ではなく「感じる環境」
- ・ 視覚を支配しない、耳のための公共空間

#### 機能性・運用

- ・ 朝～夜まで時間帯を設定した再生
- ・ 周囲の環境音を前提とした音量設計
- ・ 歩行者の安全動線を妨げない配置
- ・ 子ども・高齢者・観光客も安心して体験可能

#### 音の内容について

- ・ 自然の音・文化の音・街の音を素材として使用
- ・ 灘の酒づくり、港、暮らしの気配など  
神戸の文化を音のテクスチャとして抽出
- ・ 単なる環境音ではなく、  
音楽的な編集＝街のハーモニーとして構成

#### 時とともに変わる展示

- ・ 朝・昼・夕・夜で音の表情が変化
- ・ 季節による微細な音の違い
- ・ 更新・追加されていく音のアーカイブ

#### 10～20年後の姿

- ・ 「耳で歩く神戸」の象徴的な場所となる
- ・ ほかのエリアへと音の思想が波及していく
- ・ 音が更新・蓄積されていく「生きた展示空間」

『音のミュージアムロード』は、音によって都市と自然をつなぎ、神戸という街を耳で感じる体験へとひらく試みです。山から街、そして海へ。歩くにつれて変化していく音の風景は、その時代、その瞬間の神戸の姿を静かに映し出します。それらの音は固定された作品ではなく、人の営みや季節の移ろいととも更新され、蓄積されていく「音の記憶」となっています。

10年後、20年後、この道を歩く人々は、音を通して過去と現在、自然と都市、そして自分自身と街とを重ね合わせながら歩くかもしれません。ミュージアムロードが、見るだけの道ではなく、聴くことで街を深く知るための文化軸として育っていくことを願います。

